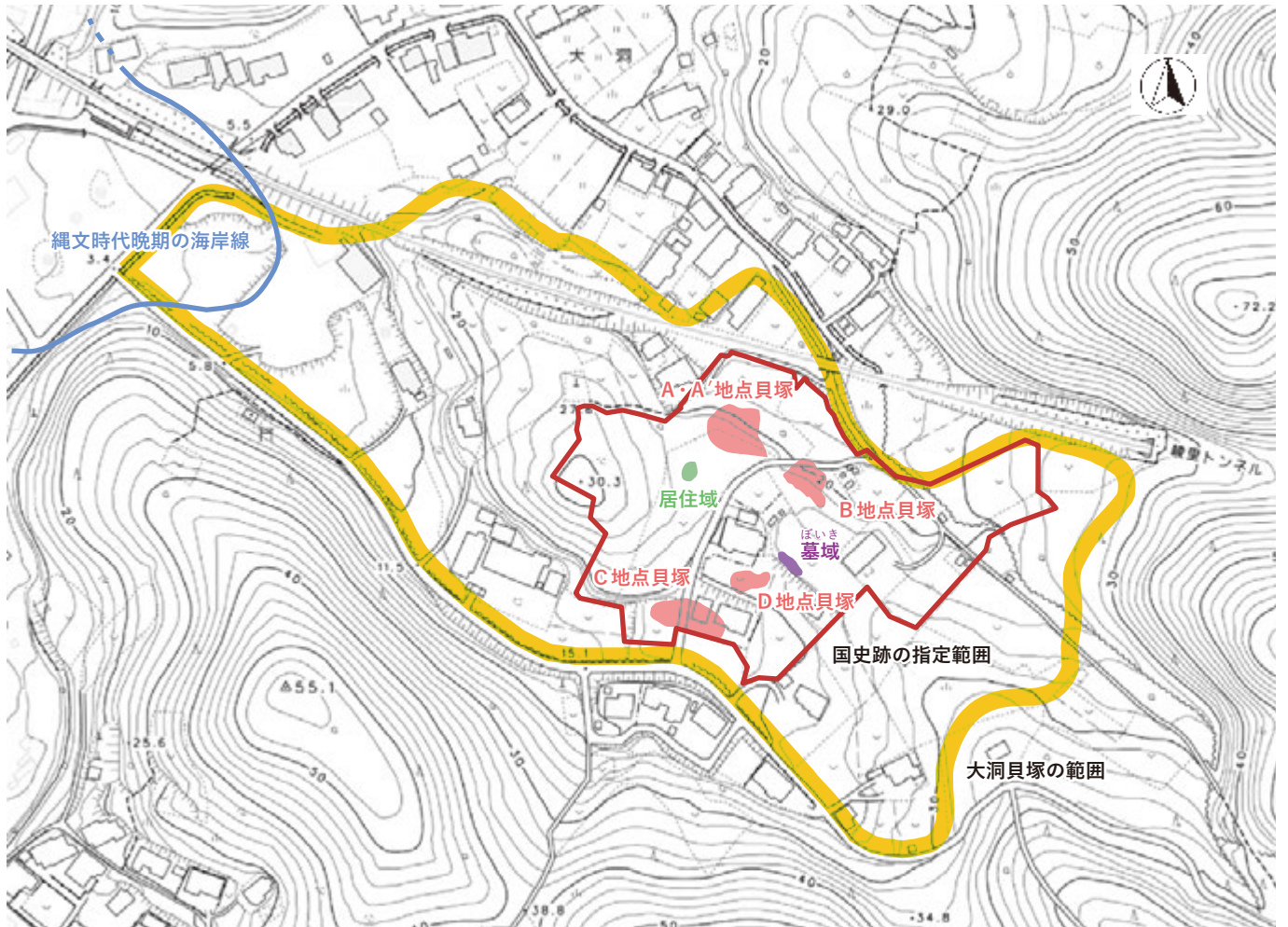




国指定史跡
大洞貝塚



大洞ムラの構成図

おほら 大洞ムラの風景

おほらかいづか じょうもん じ だいぼん
大船渡市赤崎町の大洞貝塚は、縄文時代晩
き
期（およそ3,000年前～2,200年前）のムラ
（集落）です。リアス海岸の入り江、大船渡
おおふな と
湾の奥にある、なだらかな丘の上に広がって
わん おく おか
います。

坂のなかほどには、食べかすの貝がらや、
魚の骨などがためられた貝塚（4か所の**地点**
かいづか ちてん
貝塚）があります。貝塚を調べることで縄文
かいづか じょうもん
人の食生活がよく分かりますが、このような
かいづか いせき かいづか いせき
貝塚がある遺跡は数少なく、貝塚遺跡はとて
も貴重です。

じゅうきょ きょじゅういき
住居（**居住域**）は、北風をよけるように、
おか
丘の上のくぼんだ所にありました。そのまわ
り、南北の4か所に貝塚がつけられ、南東の
かいづか
平らなところには、ここで一生を終えた家族

のお墓（**墓域**）がつけられました。

じゅうきょ かいづか
住居のまわりにつけられた貝塚やお墓は、
食べ物や家族、役目のなくなつたものを葬つ
ほうむ
た所で、大自然のなかでお祈りしながら暮
らした縄文人の心が伝わってきます。

おか
丘の南北に小川が流れ、水くみ場となつて
いました。丘の西には、海が広がっていて、
間近にあった海で貝や魚をとっていました。
海岸には、漁に使う小船もつけてあったこと
ででしょう。

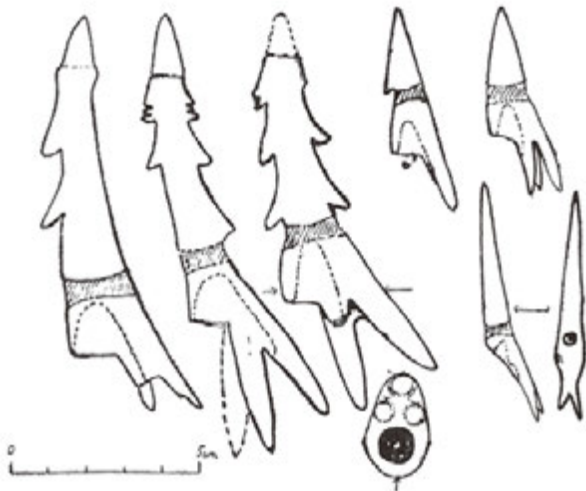
かいづか じょうもん じ だいぼん き
貝塚の大きさをみると、縄文時代晩期では
全国有数の貝塚遺跡です。このことは、おほら
かいづか いせき
貝塚のある場所が、かりや漁にとても適して
いて、安定して住み続けることができるめ
ぐまれた環境であったことを示しています。

研究の歩み

大正 14 (1925) 年、初めて本格的な発掘調査が行われました。調査は、人骨を^{はっくつ}発掘し日本人の祖先を探ることが目的で、東北帝国大学や東京帝国大学の人類学者などによって、16 体の人骨が発見されました。また、このとき発見された^{どき}土器をもとに、文様の移り変わりが分類され、「大洞式^{おほほらしき}土器」と名づけられました。



おおよまかしわ ^{はっくつ}大山柏博士による大正 14 年発掘調査のスケッチ



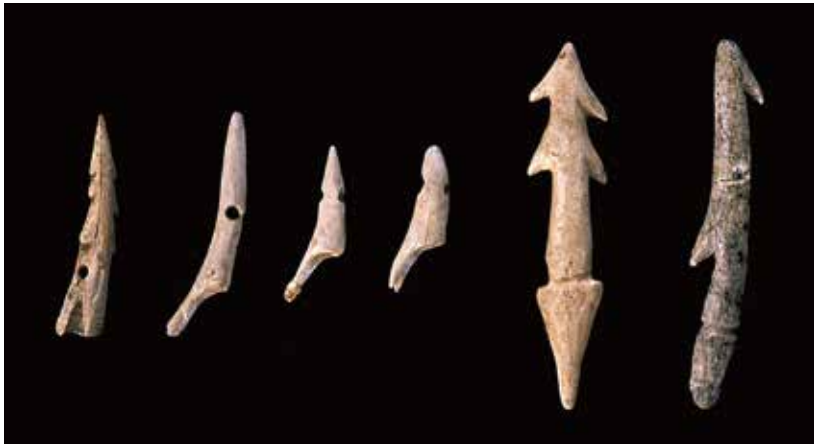
発見されたモリの先

平成 6 (1994) 年から、大船渡市教育委員会では、遺跡の^{いせき}広がりや保存の状態を調べるために発掘調査を行いました。この調査では、新たに^{ほいき きょじゅういき}墓域や居住域、海岸が発見され、^{じょうもん じだい}縄文時代のムラの様子がよく残っていることが明らかになりました。この成果により、平成 13 (2001) 年に、大洞貝塚は^{おほほらかいづか}国の^{しせき}史跡に指定されました。

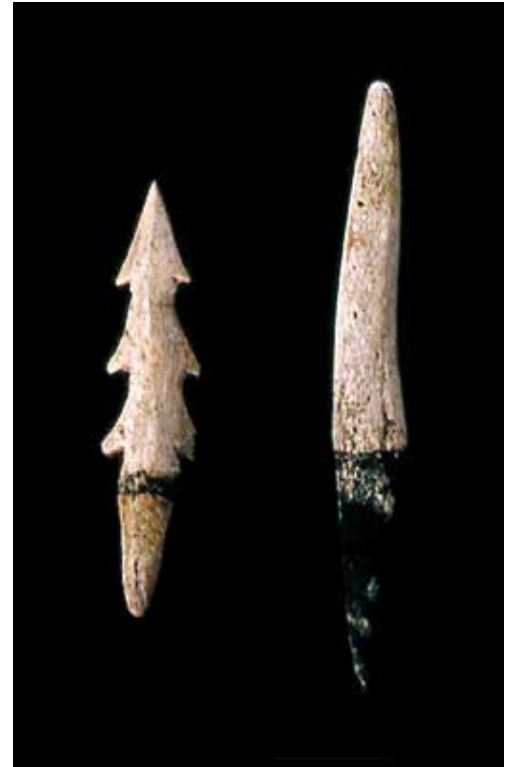


大船渡市教育委員会による^{はっくつ}発掘調査の様子

昭和 31 (1956) 年から 35 (1960) 年にかけて、^{けいおうぎじゅく}慶応義塾大学と^{わせだ}早稲田大学によって、数回にわたる^{はっくつ}発掘調査が行われました。とくに動物の骨や角で作られたツリバリやモリなど、さまざまな漁具が工夫され、さかんに漁業が行われていたことが分かりました。^{おほほらかいづか}大洞貝塚は、「^{じょうもんりょうし}縄文漁師のムラ」として注目されました。



モリの先



ヤスの先



ツリバリ

残っていた魚とりの道具

貝塚遺跡からは、動物の骨や角で作られた道具が発見されます。骨などは、土の中に長い間うまっているととけてしましますが、たくさんの貝がらがためられて貝塚が^{かいづか}つくられることで、まわりの土の性質が変わり、骨などがよく残ります。骨や角の道具は、とてもめずらしく、ほかの遺跡ではほとんど発見されない貴重なものです。

大洞貝塚で発見された骨や角の道具のうち、代表的なものは魚とりの道具です。縄文人は、シカの角でモリやヤス、ツリバリを作り、魚とりをしていました。とくに、ツバメの尾のような返しをつけたモリ、組みあわせ式のヤスなどは、大洞貝塚を中心に流行しました。さまざまな形や大きさのものが発見され、工夫を重ねていたことが分かります。それだけに、魚とりはとても大変な作業だったのでしょう。

おおほらじょうもんじん

大洞縄文人が食べたもの

貝塚にためられた貝がらや骨などを調べると、縄文人がどのようなものを食べていたか、かりや漁をどのような所で行っていたか分かります。貝塚から見つかった食べ物は、貝類、魚類、ほ乳類、鳥類などです。これらは、波のおだやかな大船渡湾、ムラのまわりの野山など、身近な所でとっていました。

貝類は、砂や泥の海岸でとれるアサリがほとんどですが、縄文人は岩場につくマガキやイガイもとって食べました。魚類では、海底にすむアイナメ、カレイのほか、サケ類も食べました。ほ乳類ではニホンジカとイノシシが多く、骨は道具を作る材料になりました。

また、人骨の成分をくわしく調べたところ、食べ物^{おほらかいづか}の3割ほどがドングリや根っこなどの植物で、7割が貝類・魚類・ほ乳類などの動物でした。そして、このうちの5割が海産物であったことが分かりました。

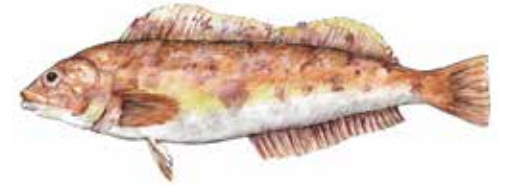
そのほか	1,140	(1.52%)
イソシジミ	52	(0.07%)
マテガイ	69	(0.09%)
ムラサキインコ	92	(0.12%)
オニアサリ	92	(0.12%)
ウチムラサキ	97	(0.13%)
マガキ	206	(0.27%)
スガイ	284	(0.38%)
オオノガイ	292	(0.39%)
イガイ	302	(0.40%)



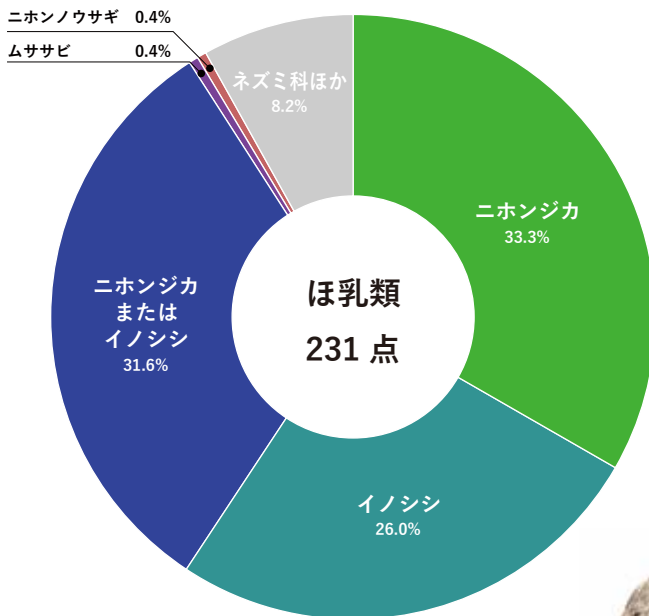
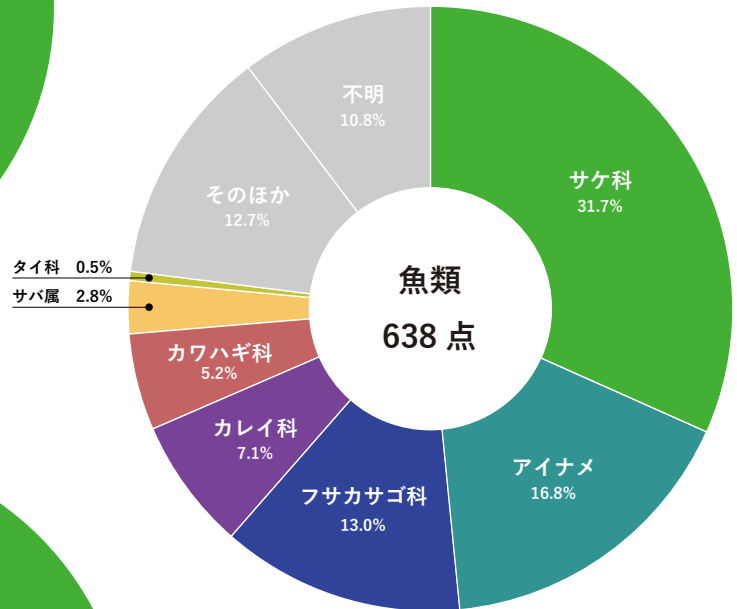
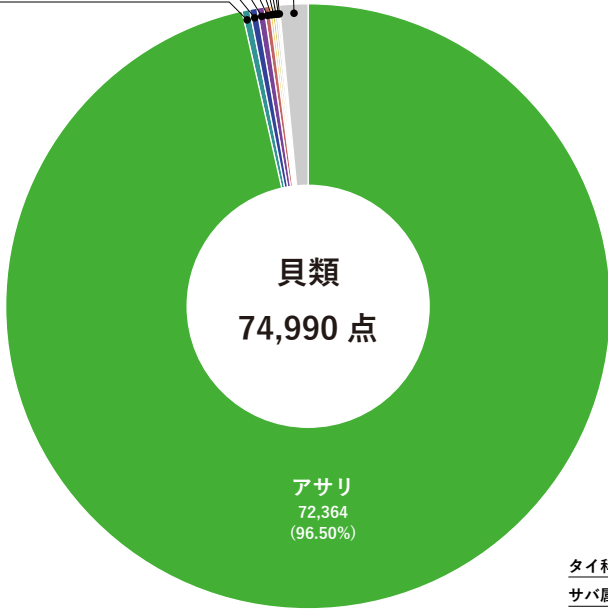
アサリ



サケ



アイナメ



イノシシ



ニホンジカ

このグラフは、A地点貝塚における動物遺存体の組成をあらわしています。貝類は縄文時代後期後半と晩期後葉の貝層、魚類とほ乳類は晩期後葉の貝層から出土した点数をもとにしています。

出典：大船渡市教育委員会 2004 『岩手県大船渡市 大洞貝塚 平成 13・14・15 年度 内容確認調査報告書』

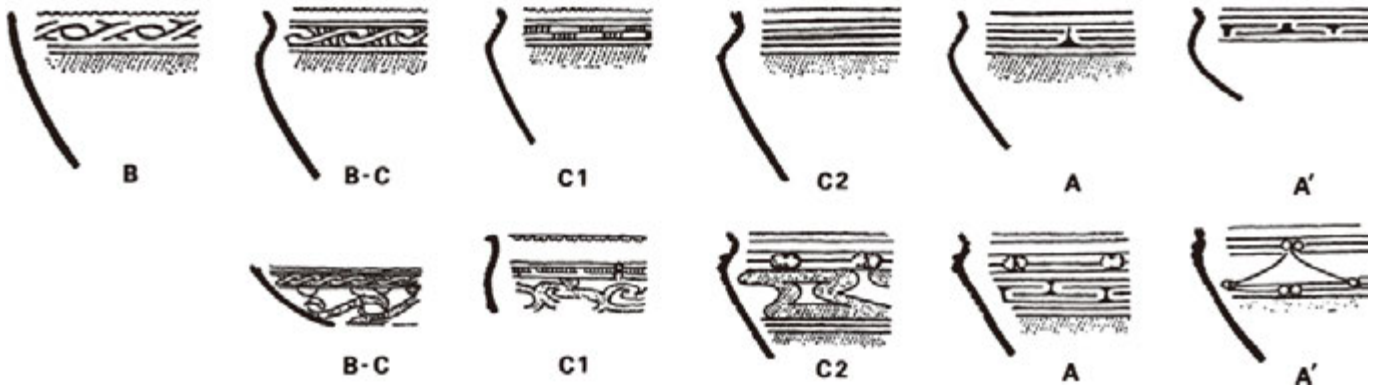
おおほらしきどき
大洞式土器

おおほらかいづか
大洞貝塚の名前を有名にしているのが、「大洞式土器」です。大洞式土器は、縄文時代晩期(今からおよそ3,000年前～2,200年前)に、東北地方を中心に作られた縄文土器です。とても広く流行し、北海道や沖縄の遺跡からも発見されています。

大正 14 (1925) 年の発掘調査で、細かな美しい文様でかざられ、うすく作られた土器が発見されました。文様の変化をたどると、作った時期を区分できることが分かりまし

た。そして、この土器は、発見した地点名をもとに、古い順にB式、BC式、C1式、C2式、A式、A'式の6つに分類され、「大洞式土器」と名づけられました。

その後、この研究がもとになって、日本全国の土器が時代ごとに細かく分類され、時代を示す物差しとして利用されるようになり、日本の考古学は大きく発展しました。このことから、大洞式土器は、土器研究の先がけとして、広くその名が知られています。



やまのうちすが お
山内清男博士による「大洞式土器」の模式図



おおほらかいづか
大洞貝塚で出土した「大洞式土器」



さまざまなアクセサリー

縄文のアクセサリー

大洞貝塚では、アクセサリーも多く見つかっています。アクセサリーには、石、角、キバ、貝がらなどさまざまな材料が使われています。

ヒトの前歯で作られたペンダントは、大変めずらしいものです。縄文時代には健康な前歯をぬくという風習がありましたが、ぬいた歯をどのようにしたのか分かっていませんでした。このペンダントの歯は、ぬいた歯と思われる日本で初めての発見で、おまじないをする特別な人が使ったものと考えられます。



ヒトの前歯のペンダント

大洞貝塚へのアクセス



三陸鉄道リアス線 陸前赤崎駅から 徒歩 10 分



国指定史跡 大洞貝塚パンフレット

令和 4 年 1 月 発行

編集・発行

大船渡市教育委員会

〒022-8501 岩手県大船渡市盛町字宇津野沢 15

TEL 0192-27-3111 FAX 0192-27-8878

